



日本語教育におけるプロジェクトワークの意義と課題 : 夏期研修コースでの実施事例から

朴, 鐘祐
高梨, 信乃
水野, マリ子

(Citation)

神戸大学留学生センター紀要, 15:1-23

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001033>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001033>



日本語教育におけるプロジェクトワークの意義と課題

- 夏期研修コースでの実施事例から -

朴 鍾 祐

高 梨 信 乃

水野 マリ子

1. はじめに

2003年から本格的に始められた「神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラム」(以下夏期プログラム)は、今年2008年に第5回目を迎えた。本プログラムの趣旨として「大学の認知度の向上と優秀な海外学生の招聘」、「異文化教育環境と地域連携の場づくり」、「日本語教育環境の向上」の三つの要素が挙げられる。これまで、「国際的教育戦略」や「地域連携」といった観点からの考察を行ってきたが^{注1}、本稿では、上記で述べた三つ目の日本語教育環境の向上の観点に基づき、本プログラムの中心的な教育内容となっている、プロジェクトワークのあり方について検討する。

夏期プログラムでプロジェクトワークが採用されたのには次のような経緯がある。2004年度にそれまでアジアだけを対象としていた夏期プログラム参加学生を欧米圏にまで広げようという大学の構想により、事前調査をする中で、留学生の派遣元から「タスク型」のコース内容なら、学生を参加させたいという要求が出されたことから、プロジェクトワークの採用が発案され、それが現在まで続いている。

当初、アジア圏の学生がこのやり方になじむかどうか懸念されたが、コース終了時のアンケート調査で高い評価を受け、アジア圏の学生にも受け入れられていることが分かり、継続しているものである。しかしながら、後の分析でも述べるように、一方で教室に座って、教師の授業を受けたいという「座学志向」の強い学生^{注2}も相変わらず存在し、コース運営の方針にさまざまな影響を与えている。これらの状況を細部にわたって検討し、よりよいコース作りを目指す必要がある。また、海外から参加の留学生のみならず、サポーターとしての日本側の学習支援者が参加するプログラムであり、双方の教育的効果を上げることも求められる。

プロジェクトワークの手法は、日本語教育の中でも、特に中級レベル以上の学習者に対して効果的な日本語教育の学習法の一つとして注目されるが、本学留学生センターでは日常の教育カリキュラムの中ではさほど用いられてこなかった。通常の学期で採用される学習法は、さまざまな要因から、なかなか新しい手法が採りにく

いが、夏期プログラムにおいて実験的に取り組むことで教員の間にも確信と経験が生まれ、通常学期においても採用するクラスが出ている。プロジェクトワークは総合的かつ実践的性格が強い側面をもち、本学日本語教育のプログラムの教育内容とも整合性があり、今後発展させるべき学習法の一つとして評価できる。

本稿は、そのような日本語教育の環境を踏まえ、新たな学習法の開発を視野に入れながら夏期プログラムのプロジェクトワーク（以下PJWという）の検証を行い、本学の日本語教育のコンテンツの向上に資することを旨とするものである。

2. 先行研究

2.1. プロジェクトワークの意義と役割

田中・斉藤（1993）ではPJWを「ある外国語を学習するときに、クラスまたは学習者のグループでなにかのプロジェクトを設定し、それを遂行していく過程でその外国語を多量に使用しながら学習していく活動」（p149）と位置づける。またその活動が「プロジェクトを遂行するなかで、目標言語の母語話者とのインターアクションが行われるようなプロジェクトが望ましい。」とも述べている。さらに、これには3つのタイプがあり、それぞれを以下のように説明している。

1) 成果発表型のプロジェクト

「プロジェクトの中心的部分は学習者のみで行い、その成果を日本人に見せてインターアクトするもの」で、「日本人とのインターアクトが部分的であるがゆえに、プロジェクトワークとしては質の高いものではない。」（同p140）

2) 調査型のプロジェクト

「ある問題について日本人にインタビューしたり、アンケートをしてその結果をまとめるもの」で、日本人とのインターアクションが豊富である点では成果発表型にまさる。」（同p140-141）

3) 共同型のプロジェクト

「最初から日本人に参加してもらって共同で行うプロジェクトで」「日本人とのインターアクションがもっとも豊かになり、かつプロジェクトのどの時点でも日本語を使わなければならない必然性がある」点で優れているとする。他のタイプのプロジェクトの場合、同じ母語を共有する学習者同士で話し合いをするときなどに、日本語を使用する必然性について教師が説得する必要がでてしまうようなことがある。このように、活動のやり方や方法について説明しなければならない局面は、内容中心のプロジェクトワークのような活動では避け

るべきであると指摘する。つまり、そのような点において、共同型プロジェクトは優れている。(同p141-142)

また、外国語学習のタイプを「正確さの学習」と「なめらかさの学習」に分けた場合、PJWは典型的に「なめらかさの学習」のための活動であると言う。そして「正確さの学習についてはPJWのなかでは行いにくい」ことになり、活動に必要な表現を知らない場合、その表現についての正確さの学習を前もって個人でおこななければならないと言う。正確さの学習はクラスワークで行うことは適当でないとするからである。いまひとつ、「役割分化」に言及し、自然な状態でのコミュニケーションにおいては全ての参加者が全く同じ立場でコミュニケーションすることはほとんどないことから、参加者の資質やニーズに基づいた役割分化が可能な点で、理想的な活動であるとしている。参加者のニーズと言う点では、参加者の個人カリキュラムに従って、自分の学習目標に合うように役割を分担することも可能であるとする。

金城(1994)では、以上のような観点の他、キルパトリック(Kilpatrick, W.H., 1918)の提唱した「プロジェクト法」他、岡崎・岡崎(1990)の論考等を上げながら「四技能の統合」「学習者主導」「学習者の相互作用」等の観点からPJWの学習法として優れた点を以下の9つにまとめている。(同p59)

- 1) 言語運用力の養成に主眼が置かれている。
- 2) 読む、聞く、話す、書くの四技能を統合した実践的手法である。
- 3) 現実に近いコミュニケーション場面、言語使用場面が設定できる。
- 4) 言語が目標達成のための必要な道具として使用される。
- 5) 目標が明確であり通常の学習活動より学習者の動機が高まる。
- 6) 学習者の自律性を高める。
- 7) コミュニケーションのためのインターアクションの機会が増す。
- 8) グループ活動により、協調性が養われる。
- 9) 知的欲求や好奇心が満たされ、達成感が高まる。

そして、これらの活動を支援する教師の役割について、キルパトリックの言う「プロジェクト法」は外国語教育を特に前提とするものではなく、一般の教育技法として提案されたものであるため、「厳密な意味でのプロジェクト法はある目標に到達するために必要な情報や技能は必要性に応じて学習者自身で収集され、また学習すべき項目も学習者自身の必要性に応じて決定されていき、目標到達までの手順や計画が全て学習者の手で行われるという形式」だが、「言語知識がまだ十分でない外国語教育の段階ではある程度教師の援助が必要である。」と論じている。そし

てその援助は「学習者の学習段階と年齢等の学習者が持つ性質に応じて変えていく工夫が必要である。」とする。

2・2．実践報告とその特徴

全てを網羅できたわけではないが、PJW実践に関する報告を以下にいくつかあげ、その特徴を比較してみる。

表 1

実践年	報告者	機関	実施期間	対象(人数・国)	備考
1990	熊井	東外大	2週間	不明(各国)	統合型
1992/3	倉八	慶応義塾大	15週間	12・16(各国)	学習者の適性
1993	金城	琉球大	2週間	45(各国)	日本人の支援者
1995	架谷他	南山大	15週間	18・22(各国)	上級者
1995	鴻野	釜山外大	15週間	48(韓国)	多人数クラス

備考欄は各報告の特徴を現したものである。東外大の報告は中級レベルの学習者に対する四技能統合のプログラム実践という点が強調されている。また、慶応大の報告は、やはり中級学習者対象であるが、PJW活動の、学習者における適性という観点からの報告である。琉球大も中級学習者に対する統合的な活動という観点から報告している。ただ、支援者を教師だけでなく、学内の日本人に求めた点で、他の機関と異なる。南山大の報告は、中級ではなく上級レベルを対象としている点に特徴がある。グループダイナミックスという観点も他と異なるユニークな視点である。釜山外大は唯一海外からの報告であるが、本来、多人数の会話教育をどのように行うかと言う課題を解決すべく採用された技法がPJWだったと言う点で他と異なる。

これらの実践報告で全てに見られる共通点は、PJW参加者が、その授業や日本滞在に関して、短期的な学生ではなく、長期の参加者である点である。神戸大学夏期プログラムは、ほぼ全員がこのプログラムのために渡りしてきた学生である。^{注3}日本に関する予備知識や体験、慣れなどがこれらの報告にある機関に比べ非常に少ないことを特徴とする。

3. PJWの実施状況

ここでは神戸大学夏期プログラムにおけるPJWの実施状況について詳しく述べる。

3.1. 参加者

本プログラムの参加学生は、神戸大学海外協定校において日本語・日本文化を学習する、主として学部生（年度によって院生を含むこともある）である。本プログラムが本格的に開始された2003年度は3大学からの15名であったが、参加大学数、参加者数ともに増加を続け、2008年度は27大学からの計41名となった。以下にその内訳を示す。なお、1名は学生ではなく、自国で留学生交流業務に従事する職員であった。

大学別参加者数（2008年度）

地域	国籍	大学	人数	地域	国籍	大学	人数
アジア	韓国	韓国海洋大学	1	欧米	米国	カリフォルニア大学アーバイン校	1
		成均館大学校	3			メリーランド大学	1
		全南大学校	1			ワシントン大学	1
		漢陽大学校	3		英国	オックスフォード大学	1
		釜山大学校	1			シェフィールド大学	1
		木浦大学校	3			バーミンガム大学	1
	中国	中国人民大学	1		マンチェスター大学	マンチェスター大学	2
		山東大学	2			ロンドン大学SOAS	1
		北京師範大学	1			オーストリー	グラーツ大学
		中山大學	2		チェコ	カレル大学	1
		華東師範大学	3		デンマーク	オーフス大学	1
		香港大学	2		オーストラリア	カーティン工科大学	2
	台湾	台湾大学	1			シドニー大学	2
				フランス	パリ第10大学	1	

また、本プログラムの特徴の1つとして、参加学生とほぼ同数の本学所属学生がサポーターとして参加するということがある。

2008年度は45名のサポーターが参加した。内訳は、学部生29名、院生15名、研究生1名であり、中には留学生も8名含まれている。

サポーターとして参加する学生は、プログラム開始の約3ヶ月前から週に1回の事前授業を受講している。この事前授業は、プログラムに参加する実習部分と併せて、国際文化学部の「国際文化学実習」、人文学研究科の「日本語日本文化教育演習」と呼ばれ、単位取得が可能な科目となっている。

この事前授業は二つの目的をもっている。第一は、本プログラムのためのサポーター養成、第二はサポーター自身に対する日本語教育学の指導である。

第一の目的は、本プログラムの運営上、必然的に要請されるものである。3週間という短い期間で40名の参加学生を指導する本プログラムでは、サポーターによる参加学生への活動支援が不可欠であるが、十分な支援を行うためにはサポーターの側にも準備が必要である。留学生のぶつかる様々な問題に対処するためには、日本語や日本文化を対象化する視点や知識が必要であるし、PJWの作業の中ではITリテラシーなどの実際的な知識や技術も必要となる。これらもろもろの備えを予めサポーター側にさせておくことにより、プログラムの教育効果を向上させようというのが第一の目的である。

第二の目的は、プログラムの参加学生ではなくサポーター自身を対象として捉えるものである。この授業は、人文学研究科の日本語日本文化教育プログラムにおける必須科目であり、国際文化学部のカリキュラムにおいては唯一の日本語教育学分野の科目となっている。この事前学習はプログラム開始後の実習とともに、本学学生への異文化理解の教育の場としても大きな意味を持つ。

これら二つの目的は両立が困難な面があり、授業内容の組み立てには課題を残している。今年度は、主にサポーター養成という目的の方に重点を置き、よりプログラム実施に直結する実際的な知識・情報の伝達や活動に時間を割いて行われた。具体的には、オリエンテーション2コマ、日本語教授法2コマ、IT教育2コマ、プロジェクトワーク概論5コマの計11コマという内容であった。

3・2・実施課題

PJWの具体的な活動内容は、最終目標である発表の形態によって大枠が決定される。本プログラムでは、日本語授業の方法としてPJWを取り入れて以来、複数回にわたって発表形態の見直しを行い、変更を加えてきた。以下、これまでの経緯を簡単に述べる。

初期の数年は、すべてのグループが別のテーマに取り組みつつも、主にパワーポイントを用いた研究発表という同一の形態をとっていた。このことに対し、発表会が変化に乏しいものになるという点のほか、準備の過程においても、統計処理やパワーポイントの作成などコンピューターに向かった作業が少なからず必要なことから、その分、肝心の間人相手に日本語を使用する時間が減っているのではないかという反省が、主に指導に当たっていた講師の側から上がってきた。そうした問題意識から、2007年度は、より多様な日本語使用・日本語学習の場を提供することを目指し、活動形態の種類を増やして行われることとなった。具体的には、従来の研究発表に、新聞、ドラマ、ディベート、街角レポートの四つが加えられた。初めての試みが多く、試行錯誤しながらの実施であったが、最終的に、発表会は変化に富んだ見ごたえのあるものになり、好評であった。しかし、その一方で発表に至るまでの学生の学習過程については、必ずしも改善された点ばかりではなく、新たな反省点も残すこととなった。それらの点を検討した結果、2008年度は、グループ構成に再度の変更を加え、研究発表（2グループ）、新聞、ビデオ、中級日本語の五つを設定することになったのである。

以下、各グループの内容と目標について個々に述べる。

研究発表は、PJW導入当初から毎年設定されている。あるテーマについて情報を集めたり考察したりした結果をまとめ、主にパワーポイントを用いて発表するという形態は、多くの学生が日本語学習以外の何らかの場面で経験しており、比較的慣れているものと言える。今年度は、2グループ設定することになった。

新聞は2007年度に初めて実施して好評であり、学習効果も認められたことから、本年度も設けることになった。最終的に紙媒体による新聞を作成することを目指して活動していく。原稿執筆という書く作業が主たる活動になるが、編集会議におけるディスカッションや、取材でのインタビュー、広告をとるための交渉など、口頭での活動もさまざまな形で行うことになる。

ビデオは今年度初めて取り入れられた。紙媒体での発表となる新聞に対して、映像を用いた発表を目指すことにより日本語学習の新たな方向を探る試みである。具体的には、学内外で取材、撮影して編集したビデオ映像を作成し、発表会でコメントを加えながら紹介していくという形をとることになった。

中級日本語も今年度の新しい試みである。本プログラムで例年問題になっていたことの一つに参加学生の日本語レベルがある。本プログラムは中級レベルの日本語学習者を対象として想定しているが、毎年2割ぐらいの学生に、そのレベルに達し

ていないためPJWでの活動についていけないケースが見られる。そのような学生に配慮し、彼らのレベルで無理のない内容を設定して学習効果を上げるために設けたのがこの中級日本語グループである。具体的には、プログラムの前半では教師主導で読解、作文、会話などを行う通常の日本語授業を行い、後半から彼らの日本語能力と時間の許す範囲で小規模なPJWを行い、発表会で披露するという形をとった。

以上、それぞれのグループの発表形態とテーマ、活動の目標を簡単に見た。

3・3・活動状況

次に、実際にプログラムが開始してからそれぞれのグループがたどった活動状況を個々に見ていくことにする。

なお、学生のグループ分けは、基本的には彼ら自身の希望をもとに決定したが、人数のバランスや日本語能力の問題で、第一希望のグループに入れない学生も一部生じた。各グループの人数は参加学生が8～9名、それに、ほぼ同数のサポーターが配属された。

研究発表1・2

研究発表は、最初に全員でテーマ選びを行うことから活動を開始した。その結果、「暑さ」と「女性と結婚」の二つのテーマが選ばれ、研究発表1、研究発表2の2グループがそれぞれ受け持つこととなった。

研究発表1の「暑さ」がテーマとして選ばれたのは、学生にとって日本の猛暑が何より身に迫って強く感じられるものだったためと思われる。具体的には、暑さ対策として日本人がどのようなことを行っているか、またそれが昔と今とでどのように異なるかなどをアンケート、インタビューで調べたり、地球温暖化の問題をめぐる、インターネットから情報を集めたり、アンケートによって意識調査を行ったりした。また、神戸環境未来館への見学・取材も行った。

研究発表2は、9名中8名までが女性でしかも中国、韓国の学生であった。「女性と結婚」は彼らには関心の高いテーマであったと思われる。結婚に対する意識の男女差の調査を中心にすえ、学内外でアンケートやインタビューを行って、データをまとめた。

研究発表1・2とも発表会はパワーポイントを用いて行い、説明は全ての学生で分担した。発表資料が比較的早く完成していたこともあり、口頭発表の練習を念入

りに行き、ほとんどの学生がメモを見ることもなく流暢に発表できた。

新聞

新聞グループは、最初に教員の指導で新聞の基礎知識について学んだ後、新聞社を見学、その後、編集会議で記事の内容や担当などを決めて紙面作りを開始した。学内外での取材を中心にさまざまな形で材料を集め、執筆を進めていった。紙面編集の段階で一時手間取ったが、最終的にA3サイズ4面の「^{あせひ}汗日新聞」が完成した。地元の「人と未来防災センター」、大阪市役所、ビール工場、パン屋などの取材記事のほか、日本の物価、歌手、パチンコ、アニメなどに関する記事、天気予報、クロスワードパズルなど多彩な内容の新聞になった。

発表会では、完成した新聞を来場者に配布するとともに、完成までの出来事や感想などを全員が口頭で発表した。

ビデオ

ビデオグループは、新しい発表形態であるため、教員側が計画した活動内容を学生に理解させることから始まった。ビデオ映像のテーマは学生同士で話し合い、「神戸周辺でのデートのしかた」「死刑制度についての意識調査」「関西人は本当にノリがいいのか」という硬軟取り混ぜた内容が決まった。その後、少人数の班に分かれ、学内や神戸周辺に撮影に出かけ、学生は監督、役者、インタビュアーといった様々な役割をこなした。撮影してきた映像を編集、加工する作業も学生が行った。

発表会では、学生がステージに並び、完成したビデオ映像を、テレビのバラエティ番組のように笑いを交えながら紹介した。

中級日本語

前述のように、中級日本語グループでは、プログラム前半は教師主導の日本語授業を行った。初級後半の文法や語彙が習得できていない学生もいたので、適宜説明を補いながら、さまざまな活動を行った。読解、会話、短文作りなどの場面では、サポーターが1対1に近い形で学生につき援助した。このサポーターとのやりとりにより、学生は日本語での会話にかなり慣れることができた。

プログラムの後半は、「ファッション」「スポーツ」の二つの班に分かれて、小規模なPJWを行った。アンケート、インタビュー、インターネットや雑誌からの情報収集のほか、学内の体育会サークルや甲子園球場での取材などを行い、パワーポ

イントを使った発表内容をまとめた。

3・4．学生の感想

以上のような活動を経験した学生はそれをどのように評価しただろうか。終了後のアンケートからPJWに対する感想を拾ってみる。

全体としては「楽しかった」「日本や日本文化を身をもって経験できた」「日本語だけで活動するのが面白かった」といった肯定的な感想が見られる。

しかし、一方で、否定的な声もあった。

一つは「PJWのテーマが面白くなかった」「グループが自分の能力や関心に合っていなかった」といったものである。これらはある意味個人的な事情、問題とも捉えられるが、グループ分けの方法などについての反省材料にするべきであろう。「PJW中に母語で話す人たちがいたのはよくなかった」というものもあった。アジア系の学生ばかりが集まってしまったグループから出た声であり、これも今後グループ分けの際の留意点としなければならない。

さらに重要視する必要があると思われるのは、「PJWの時間に無駄が多かった」「PJWは日本語の勉強としては効率が悪いと感じた」といった「学習の効率」を問題にする意見である。このような意見は、PJWよりも従来の日本語授業を志向する、次のような意見と同方向のものと考えられる。今回PJWと日本語授業を半分ずつ経験した中級日本語グループの学生から「PJWは楽しかったが、日本語の上達のためには日本語授業のほうが役に立った」という声が複数出たほか、他のグループでも「日本語の授業があればよかった」と言っている学生がいる。このような意見はアジア、欧米といった地域に関わりなく見られ、教員側の予想以上に「座学志向」の学生が多いことが明らかになった。

われわれの反省すべき点としては、PJWという学習活動の趣旨を参加学生に十分伝えられていなかったのではないかとことがある。学生の感想の中に「先生は『自分の意見を述べなさい』と言うが、その結果、効率が出ない。先生は指導すべきだ」というものがあった。これは、彼らが教師主導の授業形態にいかにか馴染んできたかを象徴する意見だと思われる。PJWの中心にある学習者主体という考え、発表会という成果ではなく活動の過程が大切であること、一見効率の悪いように見える活動の中で、生の日本語に触れ、課題を達成していくことによりどのような力がつくか、といったことをプログラム開始時にもう少し入念に説明すれば、学生の活動への動機付けができ、より積極的な取り組みが期待できるのではないかと

と思われる。

4. アンケート分析

3 - 4. ではコース終了時に実施したコース・アンケートに記述式で答えてくれた学生の意見を中心に紹介したが、本章以下では、それ以外の選択式回答部分を中心に分析し、その問題点と課題を見ていく。

4.1. PJW自体について

4.1.1. 向上した日本語能力

1) 全体に伸びたと認識された能力、伸びなかったと認識された能力

コースに参加して日本語能力はどのように伸びたかについて各参加者の評価を見ると、図1のようになる。(アンケートの内容は別添資料参照) この図は、各項目をaからeの5段階に分け、aを5点、以下b、c、d、eをそれぞれ4点から1点として集計した。回答者40名全員がaの5点に評価をした場合の200点を満点とし、それに対する実際の評価を%で示したものである。日本語能力全般への評価(「このプログラムに参加して日本語能力が全体的に向上した」という項目に対する解答)は67%であった。技能別に見ると、会話力の伸びへの評価が最も高く、90%弱であった。一方、読解力と作文力への評価はどちらも60%以下の水準にとどまっている。

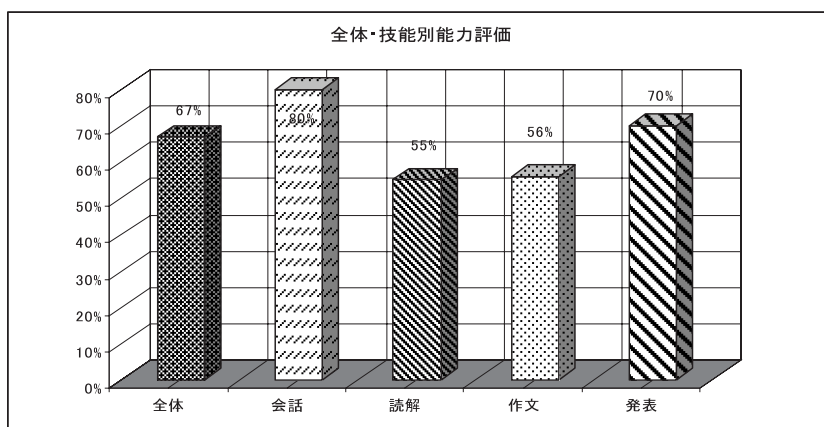


図 1

2) グループ間の差

1) の伸びた能力評価をグループ別に見たものが図2である。ここでは全体評価が最も高かったのが新聞グループで、90%近い評価となっている。それに対し、最も低かったのがビデオグループで、50%を切っている。前述のようにスタート時の日本語能力が最も低かった中級日本語グループが、伸び率評価が70%を超えて新聞グループに次ぐことが注目される。

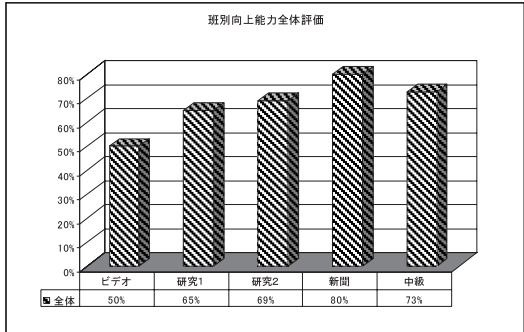


図 2

3) 技能別、グループ別伸びの差

2) で見たグループ別の評価をさらに詳しく技能別に見たものが図3である。「会話」「読解」等の各項目をそれぞれのメンバーが満点をつけた場合と比べて何%の評価をしているかを見ている。例えば、ビデオ班の「会話」を見ると、70%の評価であった。全体評価が最も高かった新聞班は、「会話」が97%、「発表」が80%であったことが分かる。他のグループが

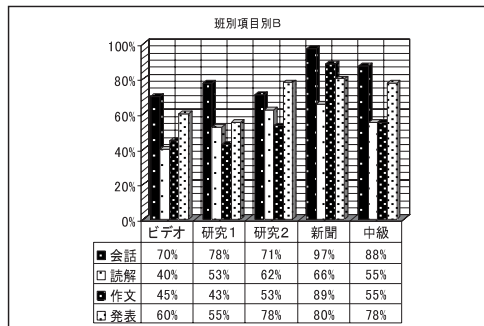


図 3

「読解」と「作文」への評価がほぼ60%以下であるのに比べ、新聞グループのそれが89%と高いのが特筆される。また、「発表」について、ビデオと研究発表1がともに60%またはそれ以下であることも一つの特徴と言える。以上の特徴を視覚的にアンテナグラフにしたものが以下の5つの図である。

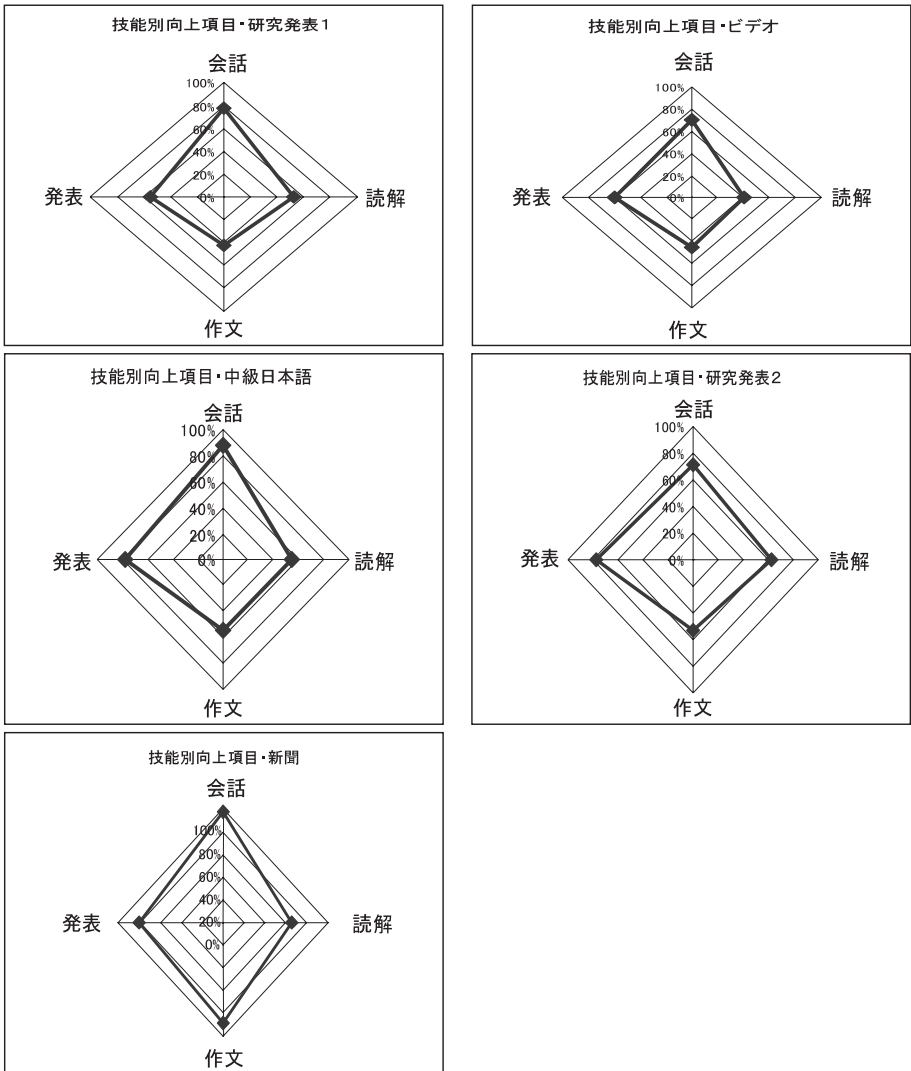


図 5

上でも見たように、やはり新聞グループが、各能力平均して伸びたという評価が最も高いことがわかる。逆にビデオグループの伸び率評価が低いことも明らかである。

4・1・2．PJWに対する評価

これまで、本コースに参加して、日本語能力がどのように伸びたと思うか、という観点からの参加者の評価を見てきたが、次に、PJW そのものに対する印象や評価についてみる。

これは、以下の6項目の観点を5段階評価したものである。

- 1．そのグループが自分の適性に合っていたかどうか。
- 2．グループのレベルが自分に合っていたかどうか。
- 3．仕事の分担量は適当であったかどうか。
- 4．PJWの活動が自分にとって役立つものであったかどうか。
- 5．PJWは自分の好みに合う活動であったかどうか。
- 6．この活動に参加して楽しかったかどうか。

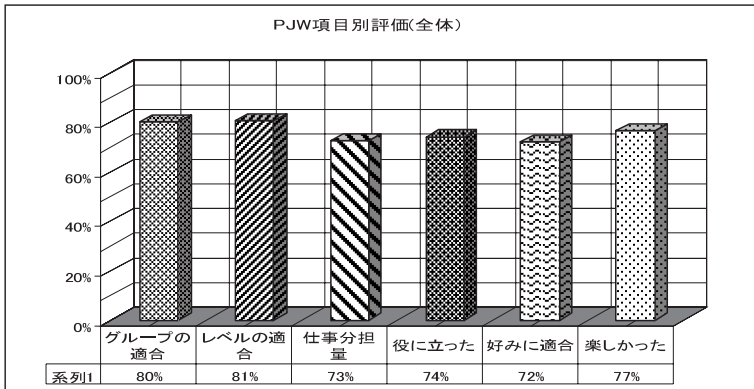


図 6

1．で見た「日本語能力の伸び率」に比べ、PJW全体の印象は全て70%から80%に収まる平均的な評価となっている。では、これをグループごとに見るとどうであろうか。

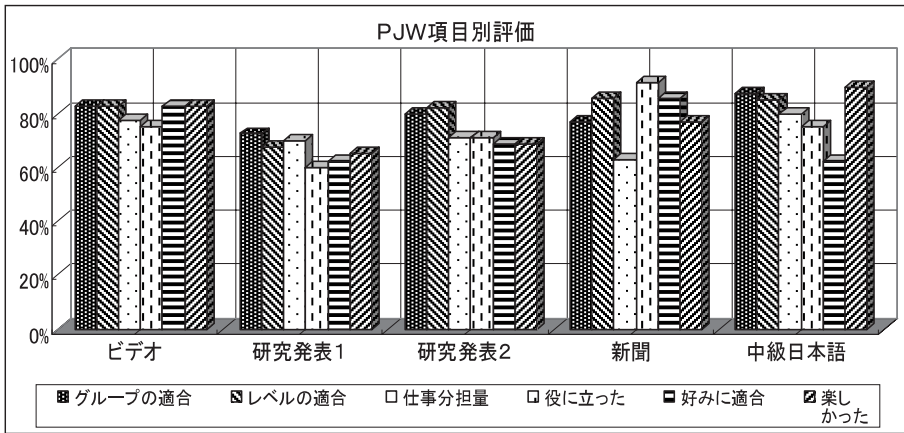


図 7

能力の伸びに関する評価があまりいいとは言えなかった「ビデオ」班が他の班より評価が平均しており、数値も80%に近い項目が多いのに比べ、研究発表1の班が全項目総体的に低いことがわかる。一方、3項目が80%を超える新聞班と中級日本語班において、それぞれ1項目だけ60%程度の評価しかなかった点が特徴としてあげられる。新聞班のばあい、それは仕事の分担当であり、中級日本語の場合は好みにあったかどうかという項目であった。

4・2．アンケート分析に関する考察

以上のアンケート結果と、「3 - 4．学生の感想」でみた学生の感想とを比較検討してみると、グループごとに高く評価した項目が異なることがわかる。つまり、活動内容や、作業の配分と、その時のメンバーの好みや資質に左右される要素が大きいと言える。一方、各作業内容でみると、仕事の分担当以外、平均して高い評価をしている新聞班の事例から、新聞作成の活動が、その他の活動に比べ、特に4技能を統合しやすい活動であることを示唆している。「2．先行研究」の田中・斉藤(1993)が指摘する、PJWは「なめらかさの学習」が優先するという点から見た場合、記事の完成等つい書くことが中心になりがちな新聞班の活動でも、インタビューやアンケート、紙面作成後の発表活動など、活動内容を工夫することで、かなり改善できることが分かる。また、「学習者中心」で「自分のやりたいことができるための動機付けの強み」という観点では、グループ分けの作業に伴う、希望グルー

プに入れない場合の矛盾が明らかになってくる。

神戸大学の夏期プログラムは、「2. 先行研究」の報告で見た他機関と比べても、日本滞在が3週間弱の短期という学生が中心となること、また、40名という比較的多人数のコースであることなどから、発生する矛盾が大きくなってくる。しかしながら、全体としてこのコースを「楽しい」と評価している学生が80%以上であることから見て、プログラム全体の評価は決して悪くなく、評価の低い点を改善することで、全体の効果も上がると思われる。

5. サポーターおよび教師について

本コースでは支援者として、実際に授業を行い、PJWの指導に当たる教師と、「3. PJWの実施状況」でも述べたように、神戸大学に在籍する日本人および留学生を含めた在学生在がサポーターとして参加している。この支援者の側から見た、本プログラムの特徴を次に述べる。人数等の概略は「3. PJWの実施状況」を参照されたい。

5.1. 支援者からの意見

5.1.1. 教師の意見

毎年参加教師から提起される意見のひとつとして、留学生、サポーター、非常勤講師、常勤教員間の連携作業に問題があるとの指摘があるが、今年に関しては改善されたとの意見が多かった。昨年度までは、1人の常勤教員が日替わりの当番制でさまざまな問題に対処していたが、今年は担当グループを決めて、そのグループだけを見るようにした。やはり責任の所在がはっきりすることが指導のやりやすさにつながったといえる。また、サポーターの学生の支援状況であるが、ちょうどこの時期は在校生の試験や集中講義の時期に当たるため、登録していても活動に参加できない学生が増え、それが各班の活動に毎年影響を与えている。今年度に関してもかなり丁寧に出席を把握するよう工夫したが、まだ十分でなかったという意見が出ている。

また、プロジェクトワークそのものの意義や方法に関して、事前の理解の共有が不十分であったという指摘が見られた。このことは、最後の発表会のあり方にも影響しており、発表会が最終的な目標であると捉える向きが見られ、プロセスを重視するPJW本来の目的とややずれを生じさせる結果となっている。

5・1・2 . サポーターの意見

以下の図 8 は、サポーターから見たPJWのあり方に関するアンケート結果である。それぞれの項目について、凡例の「 a .(とてもそう思う)」「 b .(そう思う)」「 c .(どちらでもない)」「 d .(そう思わない)」「 e .(とても思わない)」などの評価が何名あったかを示すものである。

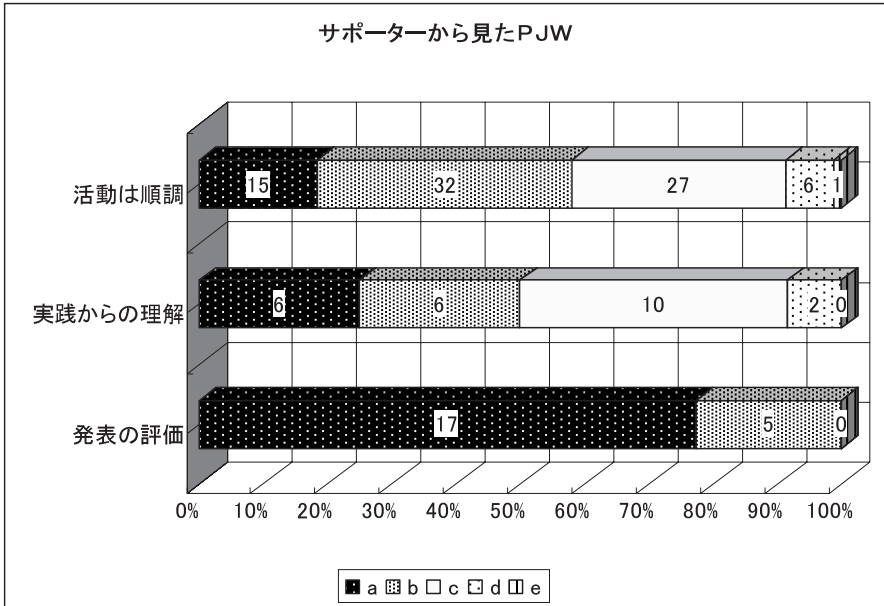


図 8

サポーターのアンケート結果を見ると、大きく3つの傾向があるといえる。ひとつは事前の授業の説明では、実習中に何をやるべきか十分に理解できなかったという点、もう一つは実習中の連携があまりうまくいかなかったという点、そしてこのプログラムの実施時期を、試験や集中講義の時期と重ならないようにしてほしいという意見であった。事前の説明に関しては、昨年まで3回ほどであったPJWの概説を2回増やして実施したのであるが、まだ不十分だということになる。回数より、説明の仕方に工夫が必要だということかもしれない。改善のポイントの一つである。実習中の連携はグループによりばらつきがあり、これも次年度の課題としたい。実施時期に関しては諸般の事情から、現行のものを動かすことはできないので、ほかの方法でこの点をカバーしなければならない。これも課題である。

PJWに対するサポーターの評価は上記グラフから見て分かるように、実習中の活動が順調だったかどうかについては50%を越える学生が、「a.とてもそう思う b.そう思う」と答えている。それに対し、実習の実践からPJWの学習法が理解できたかどうかに関しては、「c.どちらともいえない d.そう思わない」が50%を超えており、課題を残している。一方、最後の発表に関しては、アンケートに回答したほぼ全てのサポーターが高い評価をしていることが分かる。

6. 考察

6・1. 短期研修におけるPWの意義と問題点

夏の短期研修でPJWを実施することは、夏だけ短期に渡日してきてすぐに帰ってしまう学生のために多大な準備と労力をかけて、その効果は少ないのではないかとする見方もあるが、上述のようなアンケートに現れている参加者の満足度等から見て、決して後ろ向きの結果ばかりではないと考える。ただし、各参加者のコースに対する期待の内容というものをもう少し勘案する必要はあると思われる。コース実施者としては四技能をできるだけ平均して伸ばせるような内容を用意し、それぞれの技能で何らかの成果が上がったと参加者に判断されるようなコースを目指すべきであろう。その意味で、新聞作成の活動はここ2年ほどの結果から見て、最も平均して力を伸ばせる可能性を持っている。もちろん、他の活動も工夫次第で四技能を伸ばせるわけであるが、新聞に比べ、工夫の余地が大きいとすることができる。とかくPJWのような活動は「学習者主体」が叫ばれ、それを強調するあまり、ほかの部分がなござりにされる可能性をなしとしないが、金城（1994）の指摘にもあるように、「言語知識がまだ十分でない外国語教育の段階ではある程度教師の援助が必要である。」そしてその援助は「学習者の学習段階と年齢等の学習者が持つ性質に応じて変えていく工夫が必要である。」神戸大学夏期プログラムの実践から見ると、さらに上記に付け加えて、活動の種類によっても、どのような支援をどこで与えるべきかが吟味されなければならないことが分かる。

6・2. 参加者のテーマ選びとグループ分けの問題

PJWはあるテーマを決め、そのテーマに沿っての調査や探求を経て一定の成果を発表する形式であるが、本学夏期プログラムではそのPJWが短期間で行われるところに大きな特徴がある。その際、学習効果の動機づけとなる参加者の興味あるテーマの選定は大変重要な意味をもっている。このテーマの選定は、参加者のみならず

らず、指導する教員側や支援者であるサポーター側にとっても同様、問題意識において共感を得られるテーマが選定されることが望ましい。これに加えて日本文化や社会を反映するテーマでなければならぬ点も看過できない。最終的にはグループの人数調整をしながらテーマごとに人数を割り当てるが、その段階で3者の思惑が一致するかどうか重要なポイントである。今までのテーマ選びに関しては、参加者に専用ホームページを通じてのメールのやり取りで事前にテーマに関して聞き取りを行ってきた。サポーターにも同様、関心のあるテーマに関して事前講義の中で聞き取りを行ってきた。

テーマ選びの問題がPJWの成果や参加者の満足度にも直結するものであることはこれまでの経験の中で実感されてきた。しかしあまりにもテーマにこだわることで日本語習得の視点が薄れ、成果発表重視になってしまう恐れもある。この問題を解決するために、最終発表に関しては、バラエティーやおもしろさなどより、日本語習得の技能面を重視した発表形式を目指すべく、改善を加えることになった。昨年来、事前調査の際に参加者に対して、どのようなテーマに関心があるかではなく、どの発表形式を希望するかの確認を行った。その結果、従来だとPJWが始まって、三日目あたりにようやくどのテーマを扱うグループに入るかというグループ編成が決定していたものが、初日に編成が完了した。参加者は教員による発表形式の説明を聞き、その後グループ内でテーマに関する話し合いを行い、スムーズにテーマが決定できた。発表者からすれば、自分にあう発表形式と扱うテーマの選択は確かに容易なことではない。もちろん、参加者やサポーターの希望がすべて受け入れられてグループ編成が行われたわけではないが、希望聴取の段階で第3希望まで書かせることにより、決定の優先順位を明確にすることによって、かなりの部分においてその問題は解消できたと思われる。

前述のように、グループ分けを困難にする要因として、参加学生の日本語能力のばらつきがある。2008年度の夏期プログラムは中級日本語（内容的には初級上レベル）のクラスを単独に設定し、基礎的日本語クラスを希望する学生のニーズに応えることができた。これは、これまで每期、「日本語能力試験2級レベルの実力」を参加資格としているにも関わらず、3級レベルか、それ以下の学生が必ず参加してくると言う実情から、今期初めて設定したものである。一方で難易度の高い課題に取り組む学生のグループが編成できたという意味では、学生の期待に応えうる範囲を大幅に広げたといえよう。クラス編成は、プログラム開始と同時に行われるプレースメントテストの結果によるものであるが、特に中級クラスの編成結果は、学生

の要望にかなり一致するものであった。これは、「4 - 1 - 2 . PJWに対する評価」で見た図6にあるように、「レベルの適合」に関する評価がほぼ80%と高かったことから分かる。本プログラムは、中級以上のレベルを対象とするプログラムではあるが、参加者のニーズに応えるべく、今後も運営に努力していく方針である。

7. まとめと今後の展望

7.1. プロジェクトワークの改善

以上、神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラムを、プロジェクトワークの観点から分析した。その中から得られた結論は以下のようにまとめられる。

1. 発表形式の工夫を数年重ねてきた結果、4技能をバランスよく伸ばせる形式として新聞作成が挙げられる。新聞作成以外の活動には一層の工夫が求められる。
2. 新聞作成であれ、他の活動であれ、日本文化や社会の問題を広く反映できるような話題提供と発表の準備を工夫しなければならない。
3. 新聞作成は紙面の多様な性格から参加者の関心と興味を引き出しやすい。もし、活動を新聞作成に限定するなら、その興味と関心を最大限に引き出す工夫が必要である。

このような点を踏まえ、最後の発表会のバラエティーや、面白さを追及することに終始せず、短時間の研修の中で、どのような日本語技能をどれだけ伸ばせたか、日本文化に関して、どのような知識を得たかを活動の最終評価としたい。

7.2. 夏期プログラムと日本語教育の展望

本学の夏期プログラムは、短期に実施されるプログラムの充実もさることながら、本学における通常の日本語教育の基盤の向上をも目指すものである。その点においては前述のようにサポーター教育の充実も欠かせないものである。サポーター教育としては国際文化学部の「国際文化学実習」と人文学研究科の「日本語日本文化教育演習」が設定された科目である。とりわけ「日本語日本文化教育演習」は同研究科の日本語日本文化教育プログラムの必修科目として設定されている。この科目が必修となっている理由は、海外からの日本語学習者と直接接して、理論的側面と実習的側面を兼ね備えた演習ができることにある。そのようなメリットを十分に活かせるように、サポーターの立場からの授業内容の充実も求められる。

本学が実施してきた夏期プログラムの向上は、本学の日本語教育環境の活性化にもつながり、さらに海外の大学への本学の日本語教育基盤の充実を示すことにもつ

ながると言える。

<注>

- 注1 朴鍾祐・水野マリ子(2007)「夏期日本語日本文化研修プログラム」における国際的教育戦略」『神戸大学留学生センター紀要第13号』
朴鍾祐・水野マリ子(2008)「国際的教育戦略における地域連携の位置づけ - 神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラムを中心に - 」『神戸大学留学生センター紀要第14号』
- 注2 「座学指向が強い」とは、学習者参加型のタスク活動より、教室に座って、教師からの指導を受けることを望む傾向が強いという意味である。
- 注3 毎年40名の参加者のうち1・2名は神戸大学を含め日本の大学で1年の短期留学期間の最終時期に参加する場合がある

<参考文献>

- 熊井浩子(1990)「中級レベルにおける統合的プロジェクトワークの試み」
東京外国語大学付属日本語学校『日本語学校論集No.17』
- 田中望・斉藤聡美(1993)『日本語教育の理論と実際 - 学習支援システムの開発 - 』
大修館書店
- 金城尚美(1994)「四技能を統合した日本語教授法 - プロジェクト・ワーク - 」言
語文化研究紀要 SCRIPSIMUS NO.3.1994
- 倉八順子(1994)「プロジェクトワークが学習効果に及ぼす効果と学習者の適性と
の関連」
『日本語教育83号』日本語教育学会
- 架谷真知子・二村直美・津田彰子・三好和恵(1995)
「上級学習者のプロジェクト・ワーク - グループダイナミクス
に関する実験的考察 - 」『日本語教育87号』日本語教育学会
- 鴻野豊子(2008)「人数の多い日本語会話授業での試み - プロジェクトワークを通
じて - 」
www.kite.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/8/kono.pdf
- 朴鍾祐・水野マリ子(2007)「夏期日本語日本文化研修プログラム」における国際
的教育戦略」『神戸大学留学生センター紀要第13号』
- 朴鍾祐・水野マリ子(2008)「国際的教育戦略における地域連携の位置づけ - 神戸

大学夏期日本語日本文化研修プログラムを中心に - 』『神戸大学
留学生センター紀要第14号』

The meaning and problem of Project Work on Japanese Language Course

PARK Jong Woo
TAKANASHI Shino
MIZUNO Mariko

“ The Kobe University Summer program in Japanese language and culture ” was implemented for the fifth year . We have analyzed this course from the stand point of the International Strategy and Areal Cooperation. This paper aims to analyze this course about the “ Project Work ” to consider the better management of this course.